

「HTPT collection2」

「赤ちゃんABC」・・・2P

「マフィアのカイダン」・・・7P

「幸薄い選手権」・・・16P

「あなたはだあれ」・・・25P

「のーだいわーるど」・・・33P

「赤ちゃんABC」

【登場人物】

父

母

赤ちゃん

舞台はある家族の家。中央に椅子が3つ。椅子に座っている父、母、赤ちゃんがいる。母が赤ちゃんをあやしている。
明転。

母「はーい良い子でちゅね〜」

赤ちゃん（以下赤）「だーだーだーあう」

母「うんうん。この子ももう少しで何か喋れそうね」

父「そうだね」

母「でもやっぱり最初の言葉はお母さんって言ってもらいたいわ」

父「えーずるいなあ。僕はやっぱりお父さんが良いよ」

母「まあそうよね。だったら今から、交互に自分のことを言わせてみましょうよ。どっちが

先に呼んでもらえるか勝負よ」

父「分かった。これは負けられないな」

母「はじめは私からね。（赤ちゃんに）ほら、坊や。私のことお母さんって言うてごらん。

お・か・あ・さ・ん」

赤「お…か…か…ん…」

父「駄目だったね。次は僕の番だよ。（赤ちゃんに）息子よ。僕のことお父さんって言うて

ごらん。ほら、お父さんだよ、お・と・う・さ・ん」

赤「お…と…お…と、オクトウバー（ここから流暢な英語をしばらくの間、ペラペラ喋る）

〜ABC」

間

母「お父さんも駄目だったわねえ」

父「感想それ!？」

母「え?」

父「いやそんなことよりもっと驚くことがあるでしょうに!」

母「この子の顔がとても濃いつてこと?」

父「確かにそうだけど!今更言うこと?いやそうじゃなくて!今すごい流暢な英語を喋つてたじゃないかこの子!」

母「英語?何を言ってるの?」

父「キミがそんな感じなのが信じられないよ」

母「まずあなた、英語を聞き取れるの?」

父「え?いや…それは聞き取れないけど…」

母「じゃあ本当に英語かどうか分からないじゃない。たまたまそういう風に聞こえちゃっただけなんじゃないの?」

父「そうなの…かなー…?」

母「それより次は私の番ね。(赤ちゃんに) 良い?お母さんよ、お母さん」

赤「お…か…あ…あ…あー…」

母「あーおしいわー。もう少しなんだけど。ほら、次はあなたの番よ?」

父「…うん、そうだね。よし…息子よ、お父さん、お父さんだよ」

赤「お…と…う…う、ウインドウズXP (再び流暢な英語を喋る。今度は固有名詞をたくさん入れ、途中から感情的になる。例…アップルストア→トランププレジデント→アメリカンファースト…) :ABC」

父「最後のABCは何なの?さっきから」

母「さあ私の番ね」

父「いやだから!なんでスルーできるの!?!」

母「何?またさっきの話?」

父「いや今のははつきり英語だったよ!?!トランプ大統領とか、なんか自分の意見を感情的に主張してたよ!?!」

母「そんな訳ないじゃない。生まれて間もない赤ちゃんでさえも、今の世の中は政治で不満に溢れていると言いたいのか?」

父「いやそんな風刺的なことを言いたい訳ではないけど。なんで理解してくれないかなあ…!」

母「分かった分かったわ。もうそんなにお父さんって言わせたいんだったら、もう一度あなたの方が良いわよ」

父「そういう訳じゃないんだけど…でもじゃあもう一度やるから、今度はちゃんと聞いててくれよ。(赤ちゃんに) ほら、お父さんって言ってごらん、お父さん、だよ」

赤「お…オイスターソース (再び流暢な英語を喋る) 」

父「ほら!出た!お母さん!ちゃんと聞いて!うん?」

母、じつと遠くの一点を見つめ、父の呼びかけに反応しない。

父「え?何?お母さん?どこ見てるの?コワ!どういうこと!?!」

赤「…ヘイ、ジョン! (声変えて) オウ、マイケル。(2人の会話風英語を喋る) 」

父「ほら!なんか2人出てきた!会話をしてるよ!」

赤「…クエスチョン1」

父「え?リスニング問題?」

赤「What time is it now?」

父「今何時かって?」

赤「A、ベースボール。B、バスケットボール。C、ミートボール」

父「答えないでしょ!その中に」

赤「…A B C、D」

父「出た！とうとうDも出てきたよ！」

母「はい残念。やっぱりお父さんって言えないわね」

父「もうどうでも良いんだよそのことは！っていうかさつきどこ見てたの！？なんで無視してたの！？そのこと理由も説明、」

赤ちゃん、泣き出す。

母「ほらもうあなたがワーワーワーうるさいから泣き出しちゃったじゃない」

父「…(めん)」

母「赤ちゃんをめやす）ほらー泣き止んでー。良い子だからねー。ねんね〜ころり〜よ〜ん」

母、子守歌を歌うが赤ちゃん、泣き止まない。途中から子守歌が英語になる。すると赤ちゃん、大人しくなっていく。

母「Hush…little baby…don't say a word〜♪Hush, little baby, don't say a word〜♪」

父「あれえ？歌が英語になったら泣き止んできたよおっ」

赤ちゃん、母の英語の歌に合いの手を入れてくる。

母「Sleeping yeah! Sleeping,」

赤「Yeah!」

父「合いの手入れてきたよー」

母「Sleeping,」

母・赤「Yeah!」

父「一緒に歌ってるよー」

母「Baby…good,」

母・赤「Night〜…（赤ちゃんは低音で合わせる）」

父「良い低音ー声変わりが早いー」

母「はい、泣き止んだ〜」

父「いやいやもう途中で英語の歌にした時点でキミも分かってやってるでしょ？」

母「もうまだその話なの？教えてもいないのに英語を喋れる訳ないでしょうよ」

父「確かにそうなんだけどさ。もうこうなったら…（スマホを取り出す）今度はスマホでこの子の喋っていることを録音するよ」

母「そこまでのの？」

父「これで何回でも聞きなおせるよ。(赤ちゃん)ほら坊や、もう一度お父さんって言って
ごらん」
赤「お…と…う……さん」

間

母「言えたね」
父「うん…録音できてよかった」

暗転。

(終)

「マファイアのカイダン」

【登場人物】

ボス

幹部（マリー）

先輩（ブラックボール）

新人

コワイ話（再現）に出てくる人（任意）

新人「えー？先輩良いの持ってるじゃないすか（左胸を主張する）」

先輩「はあ？」

新人「では早速始めましょうぜ。まずは、自分からいきやす」

照明効果。怪談っぽいBGMが入る。

ビビるボスと幹部。

先輩「何この感じ？」

新人「演出つすよ演出。雰囲気出るでしょう？えーこの話はですね、自分の友人から聞いた

話なんすけど」

ボス・幹部「ひー」

先輩「いや早過ぎますよ。何も始まってないでしょう」

上手端に再現の人が出てきて、新人のコワイ話に合わせてマイムをする。

新人「そいつは金もなく、ボロボロのアパートに1人で暮らしていたんです。まあ廊下なんてのも昼間なのにうすぐらーく歩く音なんかもギシギシっと良く軋むそうなんすよ。そんまある日の深夜1時過ぎ。そいつ、仕事で疲れているはずなのに、中々寝付けない。今日はなんかおかしいなーなんて思っていると、隣の部屋から『ペラペラペラ』って何か喋り声が聞こえるんだよ。なーんか嫌な予感して、そのまま聞かないよう、聞かないようにするんだけど、一度気になり出したらなんて言ってるのかどんどんどん、どんどん鮮明に聞こえてきちゃうんだな。『ペラペラペラ』、『ペラペラペラだよ』って。そしてとうとうはつきり聞こえちゃったんだ……『マカロンだよ』って」

間

ボス・幹部「ひえ〜！」

先輩「いやなんで？え？マカロン？マカロンって言ったんだよね？今」

新人「はい。『マカロンだよ』って聞こえてきたんですって。で、また『これはマカロンなんだよ』って何回も聞こえるんです。それでその友人コワくなっちゃって！ガタガタガタガタ震えちゃって！マカロンだマカロンだって、」

先輩「いやいや止め止め」

新人「え？」

先輩「いやその話ちよつとズレてるんじゃない？コワイ話と。なんかちよつと面白いもん」

新人「えー？そうすか？」

先輩「そうだよ」

新人「でもその友人の隣の部屋、半年前に自殺者が出て以来、誰かがいるはずないんですけどね」

音声『キヤー！』

ボスと幹部めちやくちや怖がる。再現の人、はける。

先輩「本当にコワイ話だったー！うわ、途中のマカロンですっかり騙されたわ！」

新人「ね？だから言ったじゃないすかー」

幹部「…まあ、何も怖くなかったけどな」

ボス「ああ」

先輩「いやそれは無理ですよ、お2人とも流石に」

ボス「はあ？お前だっていつもはスーツの上着なくせに、ビビった寒気で脱げねえんだらうが？」

先輩「言いがかりが過ぎる…今日は初めから着てたでしょうに」

幹部「ふん、仕方ねえ。次は俺がコワイ話の手本ってのを見せてやろう」

先輩「大丈夫なんですか？」

幹部「やられっぱなしでいられるか」

新人「お願いしやす！」

幹部「俺が体験した、おそらく今この世で最も恐ろしいギャンブルの話だ」

ボス「お前にそこまで言わせるギャンブルか…」

新人「一体、どんなギャンブルなんすか？」

幹部「…『ガチャ』ってやつなんだけだよ」

先輩「ガチャ？」

幹部『『ガチャ』だ。あの、スマホゲームのやつだ』

先輩「は？」

ボス「なんだあ？その『ガチャ』ってのは？」

幹部「それでは順を追って話していきましょう」

照明効果。怪談っぽいBGMが入る。

先輩「あ、この話でもこういうの入るんだね」

幹部「俺も最近流行りのスマホゲームってやつに手出したんだ。初めは無料でできるし、スイスイ進めるんだが、途中から急にゲームが難しくなる。そこで出てくるのが『ガチャ』だ」

ボス「ほう…そこで『ガチャ』が」

幹部「ええ。その『ガチャ』ってやつを使えばゲームに役立つアイテムが出てくる」

ボス「なら、そのガチャってやつを使いまくれば良いじゃねえか？」

幹部「いえ。良いアイテムが出るかどうかは運次第。レア度が高い程出る確率も低い。さらに、そのガチャってやつを使うには、金がかかる。いわゆる、『課金』ってやつさ」

ボス「…かきーん？」

先輩「これ何の話？はじめてのスマホゲーム講座？」

幹部「…違うぞ？」

先輩「いや知ってますけど。これ、コワイ話なんですよね？」

上手端に再現の人が出てきて、幹部のコワイ話に合わせてマイムをする。

幹部「こつからだ。そんでもまあ俺が一番レア度が高い、スーパーデスソードというアイテムのために10回分3000円のガチャをした。が、スーパーデスソードは出なかった。まあ少し悔しい思いもあったが俺もそこまで馬鹿じゃねえ…そんな回数で出る訳ねえと、もう10回分ガチャをしたんだ」

先輩「したんかい」

幹部「だが出なかった。俺はカチンときた。しかしここで熱くなるのは2流3流だ。俺は冷静になり…冷静になった頭で、ガチャをした」

先輩「したんかい」

幹部「だが出ない。もう一度ガチャをした。出ない。もう一度！出ない！した！出ない！ガチャ！ガチャ！ガチャ！ガチャをするのが止められねえ！課金をするのが止められねえ！誰か、誰か俺を止めてくれー!!…：：：～」

音声『キヤー！』

ボス「いやー！」

先輩「いやそれただの課金中毒の話じゃないですか」

幹部「ただ一番コワイのは…そんなに課金したのに結局スーパーデスソードは出てこなかったってことだな」

音声『キヤー！』

ボス「ひえー！」

再現の人、はける。

新人「そういう一番良いアイテムが出るのは1%もないらしいっすからね」

先輩「一番恐ろしいのは、スマホゲーム界だった、と。じゃなくて、なんか私が思っていた

コワイ話とちよつとニュアンスが違うんですが」

幹部「そうか？」

新人「それでしたら次は先輩の話、お願いしやす！」

先輩「まああんな感じでも良いんですしたら、私もやりますよ。ただ私は真面目にコワイ話をしますよ」

幹部「ふん」

ボス「良いだろう」

新人「お願いしやす！」

ボスと幹部、スツと両手を耳に当て聞こえないようにする。新人、ボスと幹部の耳からスツと手を剥がす。

先輩「これは1年前くらいの話なんですけどね」

照明効果。怪談っぽいBGMが入る。

ボス・幹部ビビり始める。上手端に再現の人が出てきて、先輩のコワイ話に合わせてマイムをする。

※←初めは先輩の話にビビるボスと幹部だったが、先輩の話し方がヘタで歯切れも悪いので段々白けていき、途中から一切ビビらなくなる。先輩はそれに気付かず話し続ける。

先輩「あれは深夜12時過ぎくらいでしたか。その日は仕事で遅くなってしまったんで普段使わない、3番…いや4番街外れの墓地がある道を歩いていたんですよ。あ、さつき12時って言ったんですけど正確には1時、いや2時前くらいでしたかね。はい。それでまあ足早に歩いていたんですが、すると後ろからカツンカツンと別の足音が聞こえるんですよ…いや、コツンコツンだったかな」

3人、白けた表情で先輩を見始める。

先輩「いやカカンカカン、トントントン、ババンババン…まあコツンか。それで私が急ぐと、」

3人、再びビビりながら聞く。

先輩「その足音も同じスピードで、と言っても何から何まで同じスピードって訳でもないんですけど」

3人、再び白けた表情で先輩を見始める。再現の人も白けている。以下ずっと白けている。

先輩「多少のズレはね、ありましたけども、ね。私もコワくなってしまいました、まあそこで初めてコワくなったというか段々コワくなった感じですけど。そしてとうとうとうとうとう私が後ろをバツと振り向くと！（3人の方を振り向く）」

先輩、振り向くと3人が白けていることに気付く。

先輩「…後ろをバツと振り向くと！」

先輩、もう一度振り向くが3人とも微動だにしない。

先輩「…で、結局そこには…誰もいなかったんです…」

音声『ぎゃー』

先輩「ぎゃーも棒読みだな」

新人「先輩今のはちよっと…（左胸を指しながら）こっちの話するのかと思ったのに…」

幹部「ヘタ過ぎるだろう。あれじゃ俺でもビビれねえよ」

先輩「そこはもう認めちゃうんですね」

ボス「コワイ話舐めてんのかあ!？」

先輩「めっちゃキレてる…コワイ話嫌いなんじゃないんですか？」

ボス「次はねえからな」

先輩「申し訳ございません…でもそんなにキレルんでしたらボスも1つお願いしますよ」

ボス「仕方ねえなあ。それじゃあ日本って国の昔からある伝統的なコワイ話をしてやろう」

新人「日本ですか。お岩さんとか、のっぺらぼうでしたら知ってますが」

ボス「違う。この話はな、けっこうイカレてる話だ。まあ聞け」

照明効果。怪談っぽいBGMが入る。

上手端に再現の人が出てきて、ボスのコワイ話に合わせてマイムをする。

ボス「ある日、町会で町の若者が集まって話をしてた。まあ自分の敵となるものについての話だったらしい」

先輩「仇とかの話ですかね」

ボス「あるやつは言った。『俺は、毛虫だあ』」

先輩「毛虫？」

ボス「そしてあるやつは言った。『ワシはムカデが駄目だ。あのたくさん足があるのが駄目なんだ』若者達は口々に言い合っていく。しかしそんな中、ある若者平米が『俺にはそんなものは1つもねえぞ!』と言う訳なんだ」

先輩「うん?あれ?」

ボス『じゃあ平米。トカゲやヤモリはどうだ?』『そんなやつら、お蕎麦に混ぜて食っちゃまうぜ!』『なに?じゃあ本当にお前さんにはそういうものが無いのかい?』『あ!しまった1つだけあった』

先輩「この話…」

ボス『お!なんでいらない!』『俺は…まんじゅうだけは、』

ボス・先輩「コワイ!」

先輩「まんじゅうコワイだこれ!そういうコワイ!?落語のやつじゃないですか!」

幹部「ボス…続きを」

先輩「続き気になっちゃったよ!検索すれば出てきますよ!有名なやつですから」

ボス「ちよつと間違ったか?」

先輩「全然違いますよ!とうとう怖がらせる話ですらなくなっちゃいましたよ!もう全然駄目じゃないですか!」

ボス「なに?お前の話だって人のこと言えねえだろうが!」

先輩「いやボスよりはマシですよ!」

新人「まあまあでも…ただコワイって意味では先輩が一番なんですけどね」

先輩「だろう?俺の話だろう?」

新人「いや、話はクソでしたけど」

先輩「おい」

幹部「どういう意味だ?」

新人「いえだって先輩、昨日の抗争で心臓を銃で撃たれたのに、何事もなかったようにこの場にいるんですもん。だから、一番コワイっすよ」

間

驚くボスと幹部。固まる先輩と新人の顔をゆっくりと見るボスと幹部。

先輩「(ゆっくりり下手はけ口に移動し、上着を脱ぐとシャツが真っ赤)…まあな」

先輩、はける。

間

新人「それじゃあもう一周話しましょうか」
ボス・幹部「誰がやるか！」
音声『ギャー！』

暗転。

(終)

「幸薄い選手権」

【登場人物】

女1 (平綾緑)

女2 (国分春子)

実況

解説 (荒原)

カラオケの店員

舞台には女1と女2。
明転。

女1 「今日も仕事疲れた〜」

女2 「お疲れ様です先輩」

女1 「お疲れ〜：そうだ。せっかくの週末だし、この後どっか遊び行かない？」

女2 「良いですね。あ、でも彼氏との約束が…」

女1 「あんた彼氏とかいたの？」

女2 「…：いませんでした〜」

女1 「何よそれ〜」

女2 「そういう緑さんこそ彼氏さんとの約束とかないんですか？」

女1 「もう彼とは別れちゃったわ」

女2 「あ、すみません…：いつ頃別れたんですか？」

女1 「高校生の頃〜」

女2 「それ15年前じゃないですか〜」

女1・女2 「うい〜」

『実況』というカードを首からぶら下げた実況と、『解説』というカードを首からぶら下げた解説が上手から出てくる。

※①実況と解説は椅子に座っていても可。

※②基本的に実況と解説の会話中、女1と女2はマイムをしている。

実況 「さあ始まりました。第56回幸薄い選手権！のつけから2人、幸薄い会話をしておりましたが。解説はお馴染み、日本幸薄い協会副会長の荒原さんにお越し頂いております。本日はよろしくお願い致します」

解説 「よろしくお願いします」

実況 「今回我々にあれこれ勝手に好き放題言われてしまう幸の薄いお2人は、現在三角商事に勤めております事務の平綾緑さん33歳、同じく事務の国分春子さん32歳の両者となります。このお2人、幸の薄さとしてはどうですか？」

解説 「中々良い人材ですね。まず2人とも年齢的に本厄、前厄ですし」

実況 「基盤はしっかりしている訳ですね。しかし、とすると本厄の平綾さんの方が幸薄さとして是有力なのでしょうか？」

解説 「そうとも限りません。国分さんは今朝、通勤途中で8匹の黒猫に横切られましたから」
実況 「これは分かりませんね。おっとあの2人、これからの行き先へ移動しているようです」

女1と女2、下を見る。

解説 「今も黒猫に横切られましたね」

実況 「これは幸先の良いスタートです！しかし2人はどこへ向かうのでしょうか？」

女1 「でもあそこに行くのも久しぶりね。あそこの人、元気にしてるかしら」

女2 「良く行かれてたんですか？」

女1 「昔行きつけだったのよ。今日は色々発散しようっと」

女2 「薄暗い雰囲気が良いですね。でもそういうところ行くの、私久しぶりです」

女1 「大丈夫。私が色々フォローしてあげるから」

女2 「ありがとうございます」

女1 「楽しみね」

女1・女2 「カラオケ」

実況 「カラオケかい！大人なお店の雰囲気を出しておいて行き先はカラオケだったようです！」

解説 「週末の夜、女性2人の遊び場がカラオケ。いや良い感じで幸薄さが出ていますね」

女1 「ホントあそこのカラオケよく行ってたなー1人で」

実況 「当然のように1人。さらっとした幸薄カミングアウト」

解説 「小気味良いですねえ」

女2 「私、カラオケ2人以上で行くのはじめて」

実況 「カラオケは基本大人数で行くものです。国分さんも負けません」

解説 「薄いなあ」

女1 「あ、あそこあそこ」

女2 「あそこの建物ですね」

女1 「うん」

女1と女2、じっとその方向を見ている。

女2 「……インドカレー屋になってますね」

実況 「つぶれていました！なんと行きつけだったお店がつぶれてしました！これは幸が薄い！」

解説 「インドカレーってところもポイント高いですよ」

女1 「ごめんね…？」

女2 「いえいえそんな。この辺に別の店がないかスマホで調べます（鞆を調べる）」

実況 「気の利く後輩です」

女2 「スマホ会社に忘れた…」

実況 「ここに入れてきた！スマホ忘れ！」

女2 「あ、財布も忘れてる…」

実況 「財布も！2コンボ！」

女2 「そもそもこれ、私の鞆じゃないわ…」

実況 「もうどうなってるんだ！平綾さんが1つ抜けるか？というところで国分さん、食らいつきます！」

解説 「というかこれは鞆を間違えられた人が可哀想ですね。彼女の幸薄さは周りも巻き込むようです」

女1 「取りに戻る？」

女2 「…お願いします」

実況 「ここでリターン！」

解説 「一度帰った者が職場に戻るのには視線が痛いですね」

実況 「鞆を取りに戻り別のカラオケ店に入るまでの時間、我々はこちらまでの流れを整理しましょう。荒原さん、まだお店についていない段階でのこの幸の薄さ、どう見えますか？」

解説 「いやまだ弱いですね正直」

実況 「そうですね。中々厳しいですね」

解説 「2人ともバランス良く幸の薄さを出してはいますが、まだまだ彼女らのポテンシャルはこんなものではないはずです」

実況 「なるほど。期待しているが故の辛口コメントという訳ですね」

解説 「入るお店はカラオケ店。何も起こらないはずはないでしょう」

実況 「はい。私も期待しております…と、そうこうしているうちに2人、別のお店へ入れたようです」

女1 「機種はダムでお願いします」

実況 「謎のこだわり」

解説 「これが後に何かを生み出してくれそうです」

実況 「部屋に着き、ドリンクの注文、お互いに曲を入れ…まずは平綾さんから歌うようです」

イントロが入りました、が…おっとマイクの電池が切れている！幸が薄い！おっと国分さん、自分の持っているマイクを渡す！ファインプレーです…！が、この電池もナツシング！薄すぎる！」

解説 「どちらのマイクも電池が切れていることは中々ありませんが…二人の強者が集まってる起こした奇跡と言ってよいでしょう」

実況 「ここで国分さん、マイクを変えてもらいリターン。平綾さん。仕切り直してもう一度歌うようです。何度もマイクを確認し、電池は…オーケー！ようやく平綾さん歌いま、」

女1、歌い出す瞬間に飲み物を持った店員が入ってくる。女1、歌えない。

実況・解説「店員！」

実況「出ました！カラオケ店オリジナル、店員が入ってくる！しかもこれ以上ないというくらい絶好なタイミングでしたね荒原さん！」

解説「ええ（軽く拍手をしている）」

女2「シャンディガフ頼まりましたか？」

女1、首を横に振る。

実況「しかも注文が間違っています！平綾さんの快進撃が止まらない！」

女2「カシスオレンジは私です」

実況「国分さんの注文は合っている。ここで平綾さんとの差が開いてしまうか、」

女2、店員にドリンクをこぼされる。

実況「と思ったらこぼされた！盛大にこぼされました！」

女2「スマホ…」

実況「しかもこぼされたのはスマホだ！国分さんも食らいつく！これなら会社に忘れたま

まの方がよかったかあ!？」

解説「いやー流れるような幸の薄さ。店員さんも2人の幸薄さに当てられて逆に可哀想です。

普段はこんなミスしないんでしょうねきつと」

店員、謝罪しながらはける。

実況「現場はもう歌どころではない様子です！」

女1「えっと…スマホ大丈夫？」

実況「幸薄い人が幸薄い人を気遣っております」

解説「素晴らしい光景です」

女2「はい、大丈夫です」

実況「大丈夫じゃないでしょうに」

解説「心が強い」

女2「これ、防水のやつですから」

実況と解説、ニヤニヤと会話をしていたが突然止まる。

実況・解説「防水!？」

実況「幸薄く、ない!これは…荒原さん?」

解説「最悪です。予防したことでそのまま危険回避できてしまうのはかなり幸運なこと。こ

れは国分さん、最悪です。なんだあいつ…なんだ…あいつ…何人？」

実況「はい。残念です。日本人です」

女2、スマホをいじるが段々焦る。

実況「おや？国分さんの様子がおかしいですね。これまさか…防水性なのに故障しちゃったやつじゃないですか！？ケースの隙間から水が入って！」

解説「最高です。予防したのに効かないパターン、これは幸薄い。勝手に彼女に失望して非常に申し訳ないことをしました。謝罪します」

女1「春子ちゃん元気出して。こんな時にピッタリの曲があるの。(機種をいじりながら)少しマイナーな洋楽なんだけど、これを歌えば嫌な気持ちなんてふっとんじやうわ。一緒に歌いましょう…ダムには入ってなかったわ」

実況「ダムには入ってなかったわー！ここで伏線回収だー！」

解説「いやしかしですよ。これは国分さん、知らない洋楽を歌わされなくて逆によかったという結果になったのでは？残念です」

実況「確かに。せっかく平綾さん、あの空気読まず得意げに洋楽入れる人だったのに…」

女1「それじゃあこっちの洋楽にしよう(曲を入れる)」

解説「はい、入りました」

実況「知らない洋楽が流れてしまっー！」

電話音。

女1「あ、ごめん電話だ」

女1、下手からはける。

実況「知らない洋楽が流れる中に1人残されたー！国分さんもうただただじっとモニターを見ています！なんだこの時間！幸が薄いぞ！」

解説「PVで陽気な黒人さんが踊っていますね」

女2、ゆっくり曲を消す。

実況「そして…止めました曲を」

解説「やはりこの場に何か思うところがあつたのでしようね」

女1、戻ってくる。

女1「めんごめんご」

実況「ここで平綾さんが戻ってきました」

女2「いえいえ。今の電話もしかして…男の方ですか？」

実況「そんな訳ないでしょう。これは酷い。先ほどの件でやはり少し心中穏やかではないのか？」

解説「ちよっと冗談の域を超えていますねえ」

女2「どうなんですか？」

女1「まあ、そうだね」

間

実況「緊急事態です！お、男！お、男からのテレフォン！幸薄い選手権始まって以来の緊急事態です！あわわわわ！」

解説「落ち着いてください。どうせこのパターンは、」

女2「えー？お父さんですか？」

解説「そういうことです」

女1「ううん、違うよ」

実況「違うみたいです！これには国分さん、そして荒原さんも動揺しております！荒原さん、平綾さんに男兄弟は？」

解説「おりません。まさか本当に、」

女1「おじいちゃんからだよ」

実況「おじいちゃん！まさかのグランドファザー！やられました！」

解説「ふいー。予想を超えてきましたねえ。相手の男がおじいちゃん。これは幸が薄い」

女1「いやーちよつと帰りが遅くなると心配してかけてくるんだよねえ」

実況「過保護！いやそんなクールに言われても！」

解説「しかもどうやらよくあることのようにですね」

女2「おじいちゃん…ですか…」

実況「流石にこれは国分さんもヒイている！」

女2「おばあちゃんならよくありますけど」

実況「おばあちゃん！グランドマザーー！じいちゃんばあちゃんに差は無いぞ！なんだこいつら！」

解説「基本は良い子達なんですけどねえ。30過ぎて彼氏いないでこの会話は…やっぱり薄いなあ」

女2「そろそろ、私もおばあちゃんから電話かかってくるかもしれないです…」

女1 「そっかあ…それじゃ最後に、2人で歌って終わりにしない？」
女2 「はい。そうしましょう」

BGMが入り、女1と女2、歌い始める（マイム）。

実況 「えーまさかの三十路越えが門限終わりでしたが、第56回幸薄い選手権、全体を振り返ってみて如何だったでしょうか荒原さん？」

解説 「はい。日常にある小さな幸の薄さ。それを連続的に引き起こすお2人、とても滑稽、失礼…素晴らしかったです。特に中盤の流れるような展開、こっけ…滑稽でした」

実況 「はい。私も久しぶりに良い戦いが観られました」

解説 「しかしですね、お2人が素晴らしいところはそこだけじゃないんですよ
実況 「と言うと？」

解説 「一般的に幸が薄いとされる方々はネガティブであることが多い。しかしこの2人はそうじゃない。何が起こっても基本気にしていないのです。これは素晴らしいことです
実況 「そうですね。小さなことにいちいち悲観している方は痛々しく見えてしまいますものね。願わくば、悲観的な方はこのお2人のように前向きになってもらいたいです」

解説 「はい」

実況 「それでは今回の優勝者は…？」

解説 「あんまりこういう結果にはしたくないのですが、今回は両者ドローということですよ
しいのではないのでしょうか？」

実況 「ええ文句はありません。それ程彼女らの幸薄さは優劣がつけられないものでしたから
解説 「これからも彼女達には幸が薄くてもいえ、薄いからこそ、楽しんで生きていってほしいですね」

女1と女2、曲のサビでノリ出す。

実況 「えー2人の曲も1番と2番が終わりいよいよラストのサビに入るところです。それでは2人のサビにのって今日はこのままお別れといきましょう」

女2、最後のサビの歌い初めでミスる。

女2 「あした…」

女1・女2 「明日は明日の風が吹く〜♪」

解説 「えー曲によってはね、最後のサビだけ始まりが一拍遅いこともありますからね」

実況 「ということで幸薄い選手権、優勝者は国分さんでした！
解説 「はい」

実況 「それではまた次回の幸薄い選手権でお会いしましょう！」
実況・解説 「さようなら〜！」

徐々に暗転。

(終)

「あなたはだあれ」

【登場人物】

青年／盗人？／スネ夫？

父

母

娘（春美）

ピッチャー（関口）

キャプテン

医者

武士

盗人

町娘

のび雄

静子

ジャイアント

棋士A（山田）

騎士B（斎藤）

立会人

ヒーロー

博士

怪人

相棒マン

女

※青年以外は1人多役可

舞台は家。椅子4つ。父、母、娘、青年がいる。一家団欒とした雰囲気。明転。

青年「そこで僕は言っちゃったんですよ。それはマカロンだよ、って」

母「まあ、可笑しな話」

娘「もう止めてくださいよーそういう話は。父も母もいるんですから」

父「良いじゃないか春美。しかしこれは、一本取られたな」

四人「はっはっはっは！」

青年「いやしかしですよ、お父さんもそろそろお体には気を付けた方が良いのではないですか？」

娘「まあそれはホントね」

母「そうですよ。もって言ってやっってくださいな」

父「なんだなんだ母さんまで？私はまだまだ元気いっぱいだ！（元気アピールするが腰を痛める）…あいたたた」

娘「父さん、言った側から無茶しないでよー」

青年「はははは。こんな楽しい時間久しぶりです…あ、すみません、お手洗いをお借りしてもよろしいでしょうか？」

母「ああはいはい。廊下を出てすぐですよ」

青年「ありがとうございます」

青年、上手からはける。3人、上手をじつと見る。

父「しかしあれだな…母さん、今更こんなことを言うのもあれなんだが…」

母「なんですか？」

父「いや、今トイレに行った、あの男性は誰なんだ？」

母「ちよっとー、私もあの方知りませんよ」

父「なんだと？（娘を見る）そうかそうかそういうことか」

母「あ！」

父「ということは春美、あの男はお前の彼氏という訳か？」

娘「私もあの人知らないよ…！」

父「どういうことー？じゃあ誰だあいつ…？え？コワ…あんなに馴染んでる感じ出してきてたのに…戻ってこないし…誰？え？いつからいたあいつ？」

明転したままバタバタと次の話へ場転する。

次の舞台は病院。椅子2つ。ピッチャー（ピ）、キャプテン（キヤ）、医者、青年がいる。

キャ 「先生、それでこいつの肩は？」

青年 「どうなんですか先生」

医者 「残念ながらその肩、かなり痛めています。しばらくは野球から離れるべきです」

ピ・キャ・青年 「え？」

ピ 「おいおい…冗談キツイぜ先生よお…！明後日は地区予選決勝なんだぞ！俺達にとって初めての甲子園がかかった大事な試合なんだ！」

キャ 「関口…」

ピ 「俺は投げるぞ…！あと一回くらいの試合なら…！」

医者 「それも良いでしょう。しかしその試合があなたの野球人生最後の試合になってしまいましたが」

ピ 「…くそ！」

キャ 「関口…」

青年 「夏は最後じゃない。来年また頑張れば良いじゃないか」

ピ 「違う！今の先輩たちと、キャプテンたちと野球ができるのはこの夏が最後なんだ

…！先輩たちはこの夏がラストチャンスなんだ…！」

キャ 「関口…！」

青年 「お前の肩が壊れて、甲子園に行きたいと思う先輩なんて野球部にはいないよ！」

ピ 「うるさい！お前に何が分かる！（青年の顔をじつと見たあとキャプテンに近づく）

…あの、すみませんあいつ（青年）誰ですか？」

キャ 「え？お前の部活外の友達かと思ったけど違うの？」

ピ 「全然知らない人です！」

ピッチャーとキャプテン、医者を見る。

医者 「いや私も知らないよ…！誰だキミは！」

青年、ゆっくり下手からはけていく。

キャ 「な、何か喋ろよ！」

明転したままバタバタと次の話へ場転する。

次の舞台は街道。武士が1人いる。

武士 「拙者は流浪人。今まで数々の悪を斬り捨ててきたが、もう疲れた。これからはこの刀に囚われない人生を歩んでいこう」

町娘（裏から）「キヤー！盗人よー！誰かー！」

盗人？が上手から走って出てくる。

盗人？「へっへっへっへ！」

武士「成敗！（盗人？を斬り捨てる）」

盗人？「ギエー！（倒れる）」

武士「早速囚われてしまった…。やはり拙者は悪を斬り続ける宿命なのか…！」

町娘と盗人が上手から走って出てくる。

盗人「げっへっへっへ！」

町娘「誰か早くこの盗人を捕まえてー！」

町娘と盗人、下手へはけていく。

武士「（倒れている盗人？に）じゃあ誰だお前！？…ごめんねえ」

明転したままバタバタと次の話へ場転する。

次の舞台は空き地。のび雄、ジャイアント、静子、ゲームを持つスネ夫？がいる。

のび雄「僕もそのゲームやらせておくれよ〜ジャイアント〜」

ジャイアント（以下ジャイ）「うるせえのび雄！お前は入れてやらねえよ！帰って青だぬきとあやとりでもしてな〜！」

静子「ジャイアントさん。そんなこと言わずにのび雄さんも入れて皆で遊びましょうよ」
のび雄「静子ちゃん」

ジャイ「静子ちゃんはいつものび雄に甘すぎなんだよ。そもそもこのゲームはな、この人数じゃあできねえんだ。なあ？（スネ夫？に話しかける）お前からものび雄に言うてやれよ、このゲームが何人用なのかってよ」

スネ夫？「ジャイアント君。このゲームは4人用。だから皆で楽しもうじゃないか」

ジャイ「誰だお前」

スネ夫？「僕は皆が幸せになることを一番に考えている」

ジャイ「本当に誰なんだお前は…？」

ジャイアント、スネ夫？からゲームをとろうとするが全然とれない。

ジャイ「固いなおい」

明転したままバタバタと次の話へ場転する。

次の舞台は将棋会館。上手側に将棋盤。謎の青年が下手側に1人。青年の台詞の途中からゆっくりと棋士2人と立会人が上手側に出てくる。

青年「西暦20XX年、9月21日13時22分。突如世界は謎のエイリアンの襲来により、甚大な被害を受けた。世界の都市の8割は滅んでしまった。しかし、人類もただ手をこまねくだけではなかった。生まれて間もなく流暢な英語が喋れた超天才博士終フミヤの発明により、対エイリアン兵器が開発されたのだ。そして人類は、エイリアン達への反撃を開始した。そう、これより第二次宇宙大戦の幕開けである！」

立会人「時間になりました。それではただ今より将棋界竜王戦、山田名人と斉藤8段の対局開始です……あの人（青年）は、誰ですか？なんか……いますけど。警備員さん警備員さん、つまみだしてください」

青年、つまみだされる。

明転したままバタバタと次の話へ場転する。

次の舞台は悪の組織のアジト。博士が上手側、ヒーローが下手側にいる。

ヒーロー「やっど追い詰めたぞ悪田悪男博士！悪の怪人ばかり生み出しやがって！」

博士「くつくつく……正義のヒーローよ……逆にこのアジトへおびき出されたことにも気が付かないとは」

ヒーロー「何……!？」

博士「さて、お前はこの写真に見覚えはないかな？（大きな顔写真を取り出す）」

ヒーロー「そいつは……！お前の怪人によって殺された俺の親友じゃないか！」

博士「そうだ。しかし実は死んではない」

ヒーロー「なんだと!？」

博士「この私が改造手術を行い最強の怪人として蘇らせたのだよ！」

ヒーロー「なんてことを……！」

博士「お前はここで自分の親友によって倒されるのだ！いでよ！最強の怪人！」

ヒーロー「くそー！俺の親友が怪人として出てきてしまうー！こんな再会は望んでいない

ー！出てきてしまうー！」

青年・怪人「げっへっへっへ」

真ん中から青年と怪人が出てくるが、青年、後ろの怪人に気付き急いではける。

ヒーロー「くそー！本当に親友が怪人として出てきてやがったー！」

博士「くっくく！本当に出てくるに決まっているだろう？何を期待していた？ゆけい！最強の怪人！」

怪人、ヒーローに攻撃する。ヒーロー、それに反撃できない。

ヒーロー「くそ…！手が出せない…！」

相棒マン（裏から）「何をやっているヒーロー！」

博士「こ、この声は…！？まさか黄金の仮面と6つのポケットを胸に持つというお前の仲間、相棒マンの声か！？」

ヒーロー「そうだ！その奇抜な格好は中々用意できるものじゃないぞ！今ここに、すごい衣装のヒーローが助けに現れるぞー！」

相棒マン「助けにきたぞー！」

青年と相棒マン、下手から出てくるが青年、相棒マンに気付き急いではける。

ヒーロー「よく来てくれた！」

相棒マン「当たり前だ！」

博士「くそ…！まさか本当にそんな格好のやつが現れるとは…！もうこうなったらボスに出てきてもらうしかない！ボス！ボスー！」

ヒーロー・相棒マン「ボスだと…！？身長3メートル、体重200キロ、頭には21本の角を生やし、口には大きな牙も生やしているという悪の組織の大ボス…！」

ヒーロー「そんな姿のやつが実在するとは思えないが…そんな姿のやつが、出てきてしまうのか…！？？」

博士「ボスー！」

しかしボス、出てこない。4人、止まっている。真ん中から戸惑った青年が顔を出す。

博士「あれ？ボスー？ボスー？」

ヒーロー「どうしたどうした！」

相棒マン「我々に恐れをなしてしまったか？」

博士「ボスー！出てきてくれ！ボスー！」

青年、恐る恐る真ん中から出てくる。

間

4人「誰だよお前！」

青年「ほーらこうなった。嫌になっちゃうよ」

明転したままバタバタと次の話へ場転する。

舞台には女がいる。青年、上手から出てくる。

青年「よ！待った？」

女「いや誰だよお前！」

女、はける。

青年「くそ……！まただ……！またこれだ！またこの結末だ……。僕が誰かって？そんなの僕自身が一番知りたいのに……！……くそ！誰なんだ！僕は一体……誰なんだ……？」

青年、うなだれる。

間

青年「いや……違う……僕は、僕だ……！他の誰でもない……僕なんだ！僕は僕だ！今こうやって考えて、生きているのが……僕なんだ！他人に認めてもらうんじゃない！他人に決めてもらうんじゃない！自分が自分を……認めて決めるしかないんだ！僕は僕でしかない。僕はここにいたい！僕は、ここにいてもいいんだ!!!」

拍手の音が聞こえる。

青年「え？」

裏から様々なキャラ達の『おめでとう』が聞こえてくる。

母「(舞台に出てきながら)おめでとう」

青年「あなたは最初に出てきた家族のお母さん！ありがとう！」

ピッチャー「舞台に出てきながら」おめでとう

青年「二番目に出た肩を壊したピッチャー！ありがとう！」

武士「舞台に出てきながら」おめでとう

青年「武士！」

のび雄「舞台に出てきながら」おめでとう

青年「のび雄！」

立会人「舞台に出てきながら」おめでとう

青年「将棋の立会の人！」

ヒーロー？「舞台に出てきながら」おめでとう

青年「正義のヒーロー！」

ヒーロー？「おめでトッピロッキー！トッピロッキー！」

青年「じゃない！全然違う人だ！誰だお前！誰なんだお前！僕が出会っていないやつ
だろ！おい！」

他の5人「トッピロッキー！トッピロッキー！」

青年「他の人も全然知らない人だった！誰だこの人達！」

6人「おめでトッピロッキー！おめでトッピロッキー！」

青年「トッピロッキーってなんだよ！いやとかそもそも、さっきからおめでどうつ
てなんだよ？こんなラスト、どつかで見たことあるよ……結局、僕はここに
て良いのか？」

ヒーロー？、青年に紙を渡す。

青年「え？何これ？俺の住民票？あ、住民票があるってことは、僕はここにいて良いの
か。国から居場所を保証されている。ありがとう。住所は、群馬か…微妙…。そ
れで、僕の名前は…〇〇(青年役の人の名前)って言うのか。うっ！頭が…！色々
な記憶が、蘇ってくる…！」

徐々に暗転していく中、『おしまい』という文字が書かれた看板を持った他の
メンバーが出てくる。

(終)

「のーだいわーるぶ」

【登場人物】

晴

浩司

どじか

少年

A

B

死神／閻魔大王

黒子

舞台は病室。横になっている晴と立っている浩司。
明転。

晴 「ごほ、ごほごほ……！」

浩司 「晴！大丈夫か！？」

晴、咳が止まらない。

浩司 「くそ……！また医者を呼んでくるから！」

走ろうとする浩司の服を掴み、首を横に振る晴。

晴 「ごめんねえ……どうやら私も……そろそろのようだからさあ」

浩司 「何言ってるんだよお前……！」

晴 「こういうことは自分が一番良く分かるっていうの……本当だったんだねえ」

浩司 「変なこと言うなってば……！まだまだ大丈夫だよお前なら！昔っから……元気だけはあつたじゃねえか！」

晴 「浩司君……病気の私の世話させて……ごめんねえ」

浩司 「ば、馬鹿！ガキの頃から世話されてたのは俺の方じゃねえか。良いんだよ別に。それにいつも言ってるだろ！いちいち謝んじゃねえって」

晴 「ごめんねえ……」

浩司 「また……ありがとうで良いんだよ、そういう時は」

晴、咳込む。

浩司 「ほら……！もう喋るなって……！今は安静にしてろよ！」

晴 「(首をゆっくり横に振る) 浩司君……掃除はしっかりやるんだよ……キミの部屋、すぐ汚くなるんだからさあ……」

浩司 「……な、なんで今更俺がやらないといけないんだよ……面倒くさいから、これからも晴がやってくれよ……！晴がやってくれないと駄目なんだって……！」

晴 「料理もねえ……コンビニばっかりじゃ駄目だよ……あーでも……料理は私もできないから……あんまり言えないねえ……」

浩司 「……だったらさ！これから一緒に料理を覚えないか？2人で料理上手くなるうぜ！」

晴 「ギャンブル……パチンコはほどほどにねえ……」

浩司 「お前が元気になるまでギャンブルはしねえって決めてんだよ……！」

晴 「ホントにい……？」

浩司 「ホントだよ…だったらどうだ？今日から1カ月！俺のこと監視してみろよ！」

晴 「それはズルいこと言うねえ…」

浩司 「…何がだよ？…ズルいのはお前じゃねえかよ！こんな…言い逃げみたいな！」

晴 「ごめんねえ…」

浩司 「あ、いや、今のは違くて…あの…だから…」

晴 「そうだ…これも…言っておかないとねえ…」

浩司 「なんだよ…？」

晴 「今まで、ありがとう」

浩司 「…やっと言えたじゃねえかよ…晴」

晴、動かない。

浩司 「晴…？おい、晴！嘘だろおい！？返事してくれよ！晴！晴！俺を…1人にしないでくれ！晴！」

徐々に暗転。

暗転後、晴と浩司がはげ、どじかが出てくる。

音声 『ドジこ☆どじか第1話！あたしの名前はドジっ子どじか！』

明転。

どじか 「あたしがドジっ子どじかよ！私のドジでこの世の中をちよっぴり幸せにするの！」

少年、上手から出てくる。

少年 「どじかちゃん！変な黒服の地上げ屋集団が商店街を我が物にしようと脅し紛いの立ち退き運動をしているよ！どうしよ〜！」

どじか 「何〜？正直私達子供じやどうにもしようがないけど、ちよっとその様子を見に行き来ましよう！…タタタタ！あ！」

※どじか、←少年の台詞に合わせてマイムをする。

少年 「どじかちゃんが猫の尻尾を踏んだ！…犬の尻尾も踏んだ！…動物園から逃げ出したライオンの尻尾まで踏んだ！暴れ出した動物達が黒服集団をボロボロにしたー！これで商店街は平和になったね！やっぱりどじかちゃんのドジはすごいよ！」

…ってどじかちゃんもライオンの餌食になってる！大丈夫なの！？

どじか 「イッテテ…！」

少年 「無事だ！」

どじか 「おいおい！これがギャグマンガじゃなかったら死んでたぞー！？

少年 「ふーい！この世界がギャグマンガでありがてえー！」

間

音声 『ドジこ☆どじか第2話！早速どじかにライバル現る〜？』

※どじか、←少年の台詞に合わせてマイムをする。

少年 「どじかちゃん！隣のクラスにドジっ子どじ男君が転校してきたよー！ライバル出現だね！…なんかやかんやドジを重ねて2人が再び動物達の暴動に巻き込まれた！あれ？違う、巻き込まれたのはどじかちゃんだけだ！どじかちゃん！これでどじ男君よりドジなことが証明されたね！」

どじか 「今はあたしの心配をしろよ！」

少年 「無事だ！」

どじか 「噛まれたのが頭だったら死んでたぞー！？

少年 「頭じゃなければ大丈夫なのかい！」

どじか 「頭のダメージ一番危険！」

間

音声 『ドジこ☆どじか第8話！どじかがドジじゃなくなった〜？』

※どじか、←少年の台詞に合わせてマイムをする。

少年 「そんな馬鹿な…今日1日1つもドジをしないなんて…！そんなのどじかちゃんじゃないよ！うわーん！」

どじか 「さてと後は寝るだけで今日もおしまいね。あ、その前に。目覚まし時計をセットしなきゃ。時計のスイッチは…これかな…あ。間違っって、自爆装置のスイッチ押しちゃった！」

少年 「どじかちゃん！（喜び）」

爆発のSE。倒れるどじか。

少年 「どじかちゃん！そもそもなんで自宅にそんな装置があるの！？…この爆発だ…
今度こそどじかちゃん、」

どじか 「(起き上がる) イッテテ…！」

少年 「無事だ！」

どじか 「これが最終話だったら死んでたぞー！？」

少年 「打ち切りだけは勘弁してねー！」

間

音声 『ドジこ☆どじか第102話…』

少年 「どじかちゃん！通学路にバナナの皮が落ちてるよー！」

どじか 「流石にこれはないわ…(バナナの皮を避ける) どんなんよ？(ドヤ顔を少年に向
けながら歩いたため、目の前の電柱に頭をぶつける) ぶっ！」

少年 「よそ見をして電柱にぶつかった！」

さらにどじか、その勢いでバナナの皮ですべって転び、後頭部をもう一度電柱に
ぶつける。

少年 「結局バナナですべった！…今度は後頭部を電柱にぶつけた！まったく今日も綺麗
にドジを重ねたねどじかちゃん」

どじか、倒れたまま動かない。

少年 「どじかちゃんそういうの良から早く起きてよ。ギャグマンガの顔じゃないよ。ど
じかちゃん。どじかちゃん。…どじかちゃん？どじかちゃん！まさか…打った
のが頭だったから！？それとも、102話分の疲労が蓄積されてたから！？そん
な…！どじかちゃん起きてくれよ！いつもみたいにイッテテ…！って言うってくれ
よ！どじかちゃん！僕を1人にしないでくれ！どじかちゃん！」

徐々に暗転。

暗転後、どじかと少年、はける。

音声 『ドジこ☆どじか第102話…そう、最終話！どじか死す…！』

明転。

舞台はどこか廃墟。Aが下手側、Bが上手側にいる。

A 「ようやく見つけたぞ」
B 「おやおや裏世界の殺し屋さんが。こんな廃墟までご苦労なことだ」
A 「その余裕もここまでだ…ミスタードーナツ…!」
B 「それで？何の用だ？私を暗殺するように依頼でもあったのか？」
A 「…お前は暴れ過ぎた。自分の欲望に従い、好き勝手にな…!」
B 「はっはっはっは！せっかくこの世に生まれてきたんだあ。好きなように生きるのは当然だろう？」
A 「それで何人もの罪のない人々を殺したのか…？」
B 「おいおいおい。殺しについてだったらお前も同じだろう？くっくくくくく!」
A 「お前と一緒にするな！今ここで…死という絶望を与えてやる、ドーナツ…!」
B 「おーコワイコワイ。コワすぎて…お前のことも殺してしまおうだ！（銃を抜く）」
A 「死ね！（銃を抜く）」

AとB、銃を撃つ。互いの銃が吹っ飛ぶが、Bがナイフを持ってAを刺しに行く。しかし寸でのところでAが死角からBの腹へナイフを刺す。

B 「て…てめえ…！刺しやがったな…！俺を…！この俺を…!」
A 「そうだな。刺した。痛いかな？」
B 「くそが…！こんなところで…こんなところだえ…!」
A 「そうだ。お前は今ここで死ぬ」
B 「てめえええ…！あの世で呪い続けてやるうう…！ずっとずっととおお！お前が死ぬまでなあああ!!」
A 「それは暇なことだ」
B 「俺を！この俺を！殺したことを!!必ず後悔させてやるぜえええ!!」

A、もう一度Bを刺す。

B 「があああ…!」

B、倒れる。そして声をあげ苦しんでいる。

A 「社会のゴミ駆除…完了だ」

B、声をあげ苦しんでいる。A、Bに背中を向けキメながらBが静かになるのを

待っている。しかしB、ずっと声をあげている。中々死なない。

A 「長くない？」

B、段々静かになってくる。A、ほっとしてはけようとする。しかし再び声をあげ苦しむB。A、急いで同じ位置に戻る。

B、声をあげながらゆっくり立ち上がる。そして刺された箇所を手で押さえている。

B 「がああああ…血は出てるのに？…がああああ…！」

A、再びBを刺す。さらに連続して3回刺す。

B 「がああああ!!…がああ！がああ！がああああ!!」

B、刺された箇所に手をおいて苦しむがすぐに離して首をかしげながら声をあげる。

B 「がああ…？」

A、戸惑いながら今度はBの首を刺す。声をあげるB。声のあげ方のバリエーションを変える。

B 「ぐ…ぐ…ぐ…ぐがが…が…がああ！」

しかしやはり死なない。

B 「ぐああああ…」

A 「貴様不死身か…？」

B 「ぐああああ…違う…」

A 「違うのか…じゃあどういことだ…？」

B 「ぐああああ…俺も全然分らない…」

A 「全然分らないのか…傷は痛いのか…？」

B 「正直痛くは無い…ぐああああ」

A 「じゃあさつきからなんだその断末魔は！？」

B 「いや血とかは出てるからそういう外面的なショックで」

死神がはけ口からちらつと出てすぐ戻る。それをじっと見るAとB。

B 「…てめえの仲間か!？」

A 「ちげえわ!ここには俺1人で来たんだよ」

B 「ええ?」

AとB、はけ口から裏を見る。反対のはけ口から死神が現れ、裏を見ているAの肩を叩く。

A 「うわ!…誰だお前!？」

死神 「…そのお話は終わったぜい?へへへ…」

A 「やかましいわ」

B 「何なんだよお前は?」

死神 「いやいや…この感じで分かるでしょうよ?へへへ…」

A 「いや全然分かんないよ」

死神 「この死を連想させる真っ黒な格好。そしてこの不気味な雰囲気、今の状況。分かるだろう?へへへ…」

A 「何?お前…!」

B 「まさか…!?!」

死神 「そう…あつしはあの世からやってきた…死神だあ!」

死神、背中を見せると『天使』と書かれた紙が貼ってある。

A 「…天使って書いてあるけど」

死神 「ええ!?マジで!?(背中を見ようとするが見られない)うわーやられたー出る時
いたずらされたー。天使って貼られたー。ホントはね?渋くてカッコ良い文字で
『死神』って書いてあるんだけど…あいつらふざけやがってえ…ちよつと待って
っ」

死神、一旦はけてすぐ戻ってくる。腹に『しにがみ』とへたくそなひらがなで書かれた紙が貼ってある。

死神 「(紙を差して)「これこれ」」

A 「いや全然カッコよくないなその文字」

B 「しかも文字の配分もへたくそだぞ」

A 「というかお前何？死神？」

死神 「そう、死神だあ」

A 「いやいやそんな簡単に信じられるか」

B 「まったくだぜ」

死神 「でもお前ら、あつしがなぜあの世からやってきたのか、大方察しはついているんじゃないかあ？」

A・B 「……」

死神 「お前（B）の身に関することだ。ここまで言えば分かるだろう？」

A、Bを見る。Bは自分の刺されたところを見る。

A 「まあまあまあ：そういうことだったら、な？」

B 「ああ：まあ、ね」

死神 「だったら話は早いねえ？」

B 「ああ：俺がいくらナイフで刺されても死なないってことに関係してるんだろ？」

死神 「何それー！？」

A 「お前もびっくりするんかい」

B 「血は出るけど死なないことについて説明があるんじゃないのか？」

死神 「何その状況！？あつしそれ全然知らない：！びゃー！」

A 「じゃあ何しにきたんだよ？」

死神 「（じりりながら喋る） いやいやいやーあつしはただこいつ（B）の命日が今日だったから魂を導きに来たただけなんだけど……」

不穏なBGMが流れる。

死神 「えーコワイコワイコワイ：今人間ってそういうことあるんだあ？びゃー！！」

A 「いやそういうことないよ。とにかくちよつと落ち着けよ。お前死神なんだろ？」

B 「やめろよ：俺だつてこの状況コワイんだからよ……！」

死神 「はいもしもし」

死神、スマホを取り出し電話に出ると不穏なBGMが止まる。

A 「今の音お前の着メロかい」

B 「というか死神ってスマホ持ってるのか……」

死神 「はい、死神のエンジェル坂本でいす」

A 「名前ややこしいなあ。だから背中に貼られるんだよ」

死神「え？いやいやついでに頼むよ。うん、うんうん、分かる分かる。ああーはいはい。

(Bをちらちら見ながら)なるほどなるほど、そういう感じね今。そういうことね。

いやいやいや！人間達にはあっしがパニくったことはばれてないよ」

A「バレバレだよ」

B「なんか、ぴゃー！って言ってたし」

死神「じゃあそういうことで。はい、あでいーすあでいーす…」

死神、スマホを切る。

死神「間違い電話だった」

A・B「嘘でしょ？」

A「いやいやそれは嘘だね！だってそんなちゃんとした会話になる訳ないもの」

死神「ああいやいや。向こうはあっしじゃなくて違う死神にかけてたみたいなんだけどね。

だから間違いついでに今起こってることを教えてもらったんだあ。ほら、あっし、

こういう時教えてくれる友達いないからよう」

A「急に悲しいこと言うなよ」

B「それで、何が分かったんだ？」

死神「どうやら現在あの世は死んだ人間でいっぱいだから、この世で死人が出てあの世

にいけない状況になっているらしいんだよねえ」

A・B「はあ？」

死神「だから例えば…どつかでその、マフィアの抗争とかで心臓を銃で撃たれた人とかい

ても、すぐに死なないで一旦この世に残る、みたいな感じになってるのよ、今」

A「何その具体的な例え」

死神「今頃コワイ話でもやってんじゃないかなー」

A「どういう状況だよそれ」

死神「だからつまり…今いくらナイフで刺されようとも、病気が悪化しても、打ちどころ

が悪かろうとも、すぐには死なないでこの世に残留みたいな状態になってる訳だ

あ」

A・B「えー！？」

死神「勿論お前達だけじゃないぞお。今世界は…誰も死なない世界になっているはずだ」

晴と浩司が舞台の下手側に出てくる。

晴「今まで、ありがとう」

浩司「…やっと言えたじゃねえかよ…晴」

晴、動かない。

浩司「晴…？おい、晴！嘘だらおい！？返事してくれよ！晴！晴！俺を…1人にしないでくれ！晴！」

晴「(がばつと起きる) もう1つあった！」

浩司「うわ！」

晴「キミが登録してる巨乳倶楽部ってサイト、料金更新期限が今週末だから気を付けてねえ」

浩司「え？何？ちよつと待って。パニックなんだけど。まず俺はお前に登録してるエロサイトの更新期限まで把握されたの？」

晴「あ！まだあった！出てくるもんだねえ」

浩司「いやそうじゃなくて」

晴「浩司君の10円ハゲ、」

浩司「だからちよつと待って！いやちよつと言いかけたことも気になるけど！いや今はどうでも良い！何？体はまだ大丈夫なのか！？平気なのか！？」

晴「うん。さつき私、自分の体のことは分かって言ったけど、何だか違ったみたいだねえ」

浩司「そんなのん気な…いや嬉しいけど！」

晴「寧ろなんか…体の調子が良いよ。まるで病気なんて一旦消えちゃったみたい。ちよつと走ってくる」

晴、走ってはける。

浩司「えー…一体どういうことなんだ…？」

浩司、はける。どじかと少年が上手側に出てくる。

少年「どじかちゃん起きてくれよ！いつもみたいにイッテテ…！って言ってくれよ！どじかちゃん！僕を1人にしないでくれ！どじかちゃん！」

どじか「(むくりと起き上がる) 生きてる…」

少年「よかったあ！どじかちゃん！」

どじか「なぜ生きてる…？」

少年「え？」

どじか「あたしは…この102話で打ち切られて今日死ぬはずなのに…！そう作者に聞いているのに…！なぜ生きてる…！？」

少年「そんな結末が用意されていたなんて…！でもどじかちゃんはまだ死んじやいない

よー！」

どじか「だからコワイ…！聞いていた話と違ってコワイよ…！（少年にすがりつく）あの、えっと…お前、名前なんていうの？」

少年「僕の名前知らないんだ…102話もやってるのに…いやもしかすると、打ち切りがなくなったんじゃないの？人気が出て」

どじか「そんな訳あるか!!逆によくこんな話が102話も続いたもんだよ！」

少年「さっきから情緒が不安定過ぎるよ…どじかちゃんのキャラ崩壊がすごい…」

どじか「でもあたしが生きているのは事実…！このマンネリが酷くなったギャグ漫画は…もう少し続いてしまうの…？」

どじかと少年、はける。

A「世界は大混乱だろうな…」

B「他の奴らのことなんてどうでも良い。つまり俺はまだ、死んではいけないということだあ」

A「くそが！ふざけやがって！なんであの世はそんなことになってるんだよ！」

死神「(深刻そうに)…いや、あの今3月じゃん？だからほら、年度末で忙しくて」

A「は？年度末？」

死神「いやあと、普段は年度末でもそんなことないんだけど、人事異動で新しく閻魔になったやつが仕事できなくてさあ。ほぼほあいつのせいよ。あいつ現場知らないから」

A「うん？人事異動？現場？あの世の話なんだよな？」

死神「他の人間にも現状を説明するためにこれから外回りしないとよう」

A「いやあの世のリーマン感すげえなおい。でもそういう理由だったらいずればこいつ

(B)「もあの世へいくんだな？」

死神「そうだなー。まあ1カ月くらいあれば落ち着くとは思うんだよねえ」

B「ちっ！だったらどうせもう死ぬ体だ。その残り1カ月、俺は俺の好きなように楽しませてもらうぜ」

A「ふざけるな！お前のような奴を自由にさせるか！」

死神「そうそう。犯罪的なことは駄目だ。この世に影響が出ないように『無』みたいな生活を送ってほしいんだよお」

B「うるせえなあ。元々はそっちの事情でこうなってんだ。俺が言うこと聞く道理はねえな」

死神「まあまあそう言わずに。こつちもごたごただけは起こしたくねえんだ。そこをなんとかこらえて、穏便に頼むよ、な？」

B「ふん、うるせえつってん」

死神「もう我慢できねえー！」

A「こらえ性ねえなこいつ！そんな我慢してねえだろ！」

死神「召喚！地獄の鎌！ビッグ！」

『ゴゴゴゴ…！』というSEが流れ、大きな鎌を持った黒子が出てくる。黒子、死神に鎌を渡す。

死神「…重い（鎌を下に置く）」

A「何だよそれ」

死神「この鎌ここに置いておくから。勝手に悪さしたり無関係の人襲ったりしたら、この鎌がひとりで動いてお前を斬り刻むようになってるから」

黒子、鎌を持って2人を脅してくる。大きく威嚇し過ぎて死神に当たる。

死神「いてえ」

A「グダグダしてるなあ」

死神「とにかく。また来るから。1カ月後、ここに集合しとけよ」

A・B「はい…」

弱明。

死神、A、B、はける。晴と浩司が下手に出てくる。

音声『1カ月後だぜ！』

下手にスポット。

浩司「背中に天使と貼ってあった死神が言った1カ月…もう経っちゃまったな…」

晴「そうだねえ。この1カ月、浩司君は本当にパチンコ行かなかったねえ。偉い！」

浩司「当たり前だろうが」

晴「料理もできるようになってねえ」

浩司「それはお前もな」

晴「2人で頑張ったもんねえ」

浩司「…でもこのひと月、ホントに普通の生活しかなかったな俺達」

晴「普通かあ…。浩司君私さ、あの方は死神じゃなくて本当に天使様だったんじゃないかって思うんだよねえ」

浩司「え？」

晴 「そうでしょう？こんな素敵な1カ月、死神がくれる訳ないじゃないか」

浩司 「…うん」

晴 「浩司君…」

浩司 「何？」

晴 「ふふ。やっぱり言うことないや」

浩司 「なんだよそれ」

晴 「ひと月前に言ったことは大体できるようになったもんねえ。でも、これだけは何回

言っても良いよねえ…今まで、」

春・浩司 「ありがとう。…こちらこそ、ありがとう」

晴 「ふふ…終わらないねえ、これ」

どじかと少年が上手側に出てくる。上手にスポット。

少年 「今日であの死神が言っていた1カ月…」

どじか 「そうね」

少年 「…：僕、嫌だよ。どじかちゃんと離れ離れになるの嫌だよ！もっと一緒にいたい！

どじかちゃんと一緒にいたいよ！」

どじか 「名も知らぬ人…」

少年 「あの死神から逃げようよ！逃げてこの死なない体で、ドジで愉快なこのギャグ漫画
を続けようよ！」

どじか 「え？何を言っているの？」

少年 「え？」

どじか 「いや、あたしが死なないという体（てい）だとこの作品は、つまらなくなるのよ？
読者はドジを起すあたしに、『どんな大きなドジが起きようがどうせ無事なんだ
ろ？だけど、もしかしたら今度こそどじかちゃんも死んじゃう…？』と毎回思わせ
るのがこの作品の面白さなの。だからあたしが絶対に死なないと分かっていたら、
何も面白さは生まれないの。お前頭大丈夫？」

少年 「そこまでこの作品のことをロジカルに考えてくれてたんだね…」

どじか 「だから私はやっぱり第102話で…死ぬべきなの」

少年 「どじかちゃん…」

AとBが真ん中から出てくる。真ん中にスポット。

A 「やっと1カ月か…」

B 「くそ…この鎌のせいでホントに普通の生活しかできなかった…」

A 「わざわざためえの結末を見届けに来たんだ。さっさとあの世へ行きやがれ」

死神？が出てくる。上手、下手、真ん中にスポット。

死神？「この世の者達よ…待たせたな」

A「なんだそのキャラ。能書きは良いから、早くこいつをあの世へ連れていってくれ」

B「ちっ！」

晴「ばいばい…浩司君」

浩司、頷く。晴、死神？の方へ一步踏み出す。

少年「ばいばい…どじかちゃん」

どじか、頷く。どじか、少年を死神？の方へ押し出す。

少年「なんで!？」

どじか「血迷った」

死神？「ふっふっふっふ…（落ちてる鎌を蹴る）痛い！なんだこれ！誰の鎌だ!？」

A「お前のだよ」

死神？「この鎌は…あの死神のか」

A「え？」

死神？「私をこの鎌の死神と勘違いしているようだが、私はあいつではない」

浩司「何言ってるんだ…？」

死神？「そうこの私こそが…閻魔大王だ」

6人「閻魔!？」

少年「う、嘘つけ!どう見たってこの前の死神じゃないか!」

死神？（以降閻魔）「あの世の職員はもれなく全員同じ顔をしている」

少年「なんてことだ…!」

閻魔「その証拠に！私の背中にカツコイイ文字で『閻魔』と書いてあるだろう！（背中を

向けると『えんま（笑）』と書いてある）」

浩司「かっこ笑いってあるけど…」

閻魔「ええ!？マジで!？（背中を見ようとすると見られない）うわーやられたー」

A「見たことあるなそれ!閻魔もイタズラされるのかい」

B「確かにこいつ仕事できなそうだ」

閻魔「おほん。今日この閻魔様が直々にこの世へやってきたのは他でもない。…私はこの一か月、仕事を頑張った。けっこう頑張った。昼寝もしなかった。しかし…あの世の整理はできなかった」

6人「は？」

閻魔「そこで私は考えた。だったらこの期間に死んじやった人をノーカン、つまり死んだことにしなければ良いのではないかと。そう、今日はそれを直接伝えにきたのだ」

間

6人「ええ！？」

閻魔「と言ってもね！と言ってもね！全員ではない！全員ではない！流石に！怒られちゃうから、もつと偉い人に」

A「閻魔より偉い人いるのか？」

閻魔「生き返れるのは半分、はまだ多くて怒られるので…1/3!!3人に1人だ！」

浩司「ちょ、ちよつと待ってくれ。話についていけないのだが」

閻魔「どんどん進むぞー。では今からその死ぬはずだった人間をランダムに3人集め、生き返る者を決めるために…戦ってもらう！」

A「戦い、だと…？」

閻魔「そう。そしてその勝者のみが…生き返ることができるという訳だ！」

B「ほう、悪くない」

閻魔「はい！（手を叩く）」

照明が全体照明になる。

6人「うわ！？」

浩司「急になんだこの人達！」

閻魔「今回の3人…そう、お前らが戦うメンバーは…この3人だ！（3人を指す）」

A「こんな女子供が…？」

B「くつくつく…よく分からんが、これなら楽勝だ。俺もツキが回ってきたな」

浩司「ふ、ふざけんな！そんな大事なことスイスイ進めやがって！そもそも戦うって、こいつは病み上がりでしかも女なんだぞ！」

少年「いやいや！こつちなんて女の子なんだぞ！」

どじか「早くルールを説明してちょうだい」

少年「適応力が高い！」

閻魔「焦るな。お前達が戦う種目、それは…それは…それは…（手帳を取り出して見たりする）」

A「…どうした？まさかお前、そんな重要なことを忘れちゃったのか…？」

B「うわー…やっぱり仕事できねえーこいつ」

閻魔「は、はあ？ちゃんと覚えてますけどー？何言ってるのマジで。種目は…あの、す、

相撲でーす」

6人「相撲!?!」

A「いやいやどう考えてもテキトーだろ!」

閻魔「閻魔の言うことに二言はない」

A「相撲って…この面子だろ?不公平過ぎないか?」

B「一番得意」

A「しかも一番得意って言ってるぞこいつ!」

閻魔「それじゃあ3人見合って見合って…」

浩司「おい!マジで相撲なのかよ!」

晴「どうしようねえ」

B「お前ら2人まとめて相手してやるよ」

どじか「この野郎ナメ腐りやがって」

閻魔「はっけよい、のこった!」

浩司「晴ー!」・少年「どじかちゃん!」

Bとどじか、合図と共に駆けだす。

※←少年・A・浩司の台詞に合わせてBとどじか、動く。

少年「それからのことは一瞬だった。どじかちゃんは何もない床であり得ない程転び、一番最初に負けてしまった、ドジで。でも転んだことにより、コワイおじさんの攻撃を避けたんだ」

A「そしてあいつは少女につまづき、そのまま少年に突っ込んだ。不幸にも関係の無い人を襲った、暴行したと落ちている地獄の鎌に判断され、滅多切りにあった。それはもう滅多切りに」

浩司「そしてイカレた男も倒れた…!この戦い、残ったのは…晴だ!!」

浩司・少年・A「ドジつえー!」

閻魔「じゃあお前(B)、あの世行きね」

B「畜生がー!」

B、真ん中から吸い込まれるようにはける。

A「ふん。今度こそゴミ駆除…完了だ」

少年「でも、どじかちゃんも…」

どじか「これで良いの。さっきも言ったでしょ?作品のために私はあそこで死ぬべきなのよ」

晴「なんだか良く分からないうちに終わってたねえ。でも、あなたのおかげで私はこのままこの世に残ることができたってことは分かるよ。本当に、ありがとうねえ」

どじか「やめてよ。あたしのドジはこの世をちよっぴり幸せにするためにあるの。だから最

後にか弱い女性を救えたのなら、本望よ」

晴・浩司「どじかさん…」

少年「今更だけど僕達の年齢は10歳だよ！」

閻魔「さあお前も。そろそろ時間だ」

どじか「ええ。それじゃ行ってくるわ」

少年「待ってどじかちゃん！だったら僕も…一緒にあの世へ行くよ！」

どじか「え？」

少年「へへ…ドジっ子のキミを、1人にはできないからね。へへ」

どじか「名も知らぬ人…」

閻魔「(少年の肩に手を置く)あのためから今あの世は人がいっぱいだから追加とかできな

いから。キミ話聞いてた？」

少年「あ、無理ですか…すみません…」

どじか「そうよまったく、馬鹿なこと言わないで。お前はこの世に残るべきなの。私がいな

くなった後、新しいギャグマンガの主役をやるためにね」

少年「え？」

どじか「私とずっといたお前にならできるわ」

少年「そんな急に…無理だよ…僕がどじかちゃんみたいになんて…」

どじか「大丈夫。お前はけっこう面白い。それに一部の読者からはネットの掲示板とかで、

『どじかといつもいるこいつは結局誰なんだ？名前も出ないし。誰だお前！』とか

言われて盛り上がっているの」

少年「そうだったんだ…」

どじか「そういうところを上手く利用したギャグマンガにすれば良いのよ」

少年「…分かった！どじかちゃんがそう言うなら、僕、頑張るよ！」

どじか「(頷く)そして皆さんも。あんまり早くこっちに来ちゃ、駄目よ」

晴「うん、どじかさん」

浩司「ありがとう…本当にありがとう…どじかさん！」

A「ドジこどじか、か…その名前…覚えておこう」

少年「もはやギャグキャラの慕われ方じゃないね！でも僕も、そんなどじかちゃんに負け

ないよう、こっちで頑張るからね！」

どじかと死神、真ん中からはける。

少年・晴・浩司・A「ばいばい！どじかちゃん！」

徐々に暗転。

完全暗転。

音声『次週から新連載！この世を離れ、今度はあの世で大活躍！？あの世もドジで平和にするわ！ドジこ☆どじかセカンドステージ！そして新連載もう一本！色んな所に現れる正体不明の男！今日も叫ばれるあの言葉、誰だお前！？あなたはただあれ？はーじまーるよー！』

どじか・少年（声）「はーい！」

（終）